

分担研究「小児期の成人病危険因子の実態 把握に関する研究」の総括

分担研究者：村田 光範

要約： 幼児期の成人病危険因子については、まだその実態が十分に把握されていないのが現状である。そこで、この研究では、幼児期の肥満を中心に、北海道（旭川市）、東北（盛岡市）、関東（千葉市、八日市場市）、中部（沼津市）、近畿（京都市）、四国（松山市、高知市）、九州（福岡市）の各地で疫学的な調査を行った。また、幼児期の体の動きを量的、質的に検討するための基礎的研究を行った。

見出し語： 乳児、幼児、児童、生徒、肥満、高脂血症、高血圧、運動の低量評価

旭川市とその近郊8町では、昭和63年度の3歳児検診の記録に基づくと、3,755人中肥満度15%以上の頻度は4.58%、肥満度20%以上の頻度は2.24%であった。

盛岡市における3歳児、幼稚園児および小学校児童の肥満の発症時期を検討した結果では、3歳児の約50%が1歳6ヶ月の時点ですでに肥満傾向を示しており、小学校児童で肥満しているものの約40%がすでに3歳の時に肥満を発症していた。

千葉県安房郡および館山市の小学校における肥満の出現頻度は、この10年間（1980-1989）に、女子では大きな変化を見なかったが、男子では約2倍に増加している。脂肪肝、高血圧、高脂血症

などの合併率も肥満が高度になるほど高くなる傾向を示した。

千葉県八日市場市の保育園児249名と小学校2校の児童542名について、成人病の危険因子である肥満、血清総コレステロール、HDLコレステロール、中性脂肪、動脈硬化指数、血圧を検討した。保育園児では高血圧は認められなかったが、その他の危険因子は、肥満や血清脂質異常などは全体の10-20%に認められた。小学生の方が保育園児よりも危険因子を持つ率が高かった。また保育園児、小学生ともに、肥満が高度になるにつれて危険因子を持つ率が高い傾向を示した。

沼津市の3歳児1028名（男530名、女498名）に

ついて調査した結果では、15%以上の肥満度を示した肥満児は、男20名(3.8%)、女19名(3.8%)であった。

京都府立医科大学小児科の肥満児外来を受診した幼児について、追跡調査とその家庭生活および意識調査を行った。約10年後の追跡調査ではおよそ半数(14/27)に肥満の改善が見られた。肥満の改善は肥満の治療期間よりも、その後の期間において著明であった。このことから、幼児肥満の治療においては、性急な肥満度の改善を目指すよりも、将来の成人病を予防するという観点から、家族に対して幼児期からの肥満の治療や予防の重要性を説くとともに、食生活を中心とした生活環境の整備や健康意識の植えつけなど、息の長い地道なキャンペーンを展開することが大切であると思われた。

松山市において、乳幼児期の栄養状態と中学生、高校生の肥満および高脂血症との関係について調査した。現在、中等度以上の肥満を示す児童、生徒では乳児期および幼児期に肥満していたものが有意に多く、これら児童、生徒の肥満は約1/3が乳児期に、約1/3が幼児期に、そして残りの1/3が学童期に始まっていることが分った。また、高脂血症を有する児童、生徒でも乳幼児期に肥満していたものが有意に多いことが分った。これらの結果は、小児成人病対策は乳幼児期から始めなければならないことを強く示唆するものである。

高知市の幼児(4~6歳)、106名を対象にソルトペーパー法(栄研化学製、尿中Na定量試験紙、以下この濃度をソルト値という)にて、食塩摂取量と食習慣の関係を検討した。対象106名中、Na

排泄について低濃度群は18.3%、中濃度群は57.0%、高濃度群は23.7%であった。個人についてはソルト値を6g/l以下にするよう食事指導をすることにより幼児期からのうす味噌好への食習慣指導の指標にもなりうると考えられた。ソルト値が14g/l以上の高濃度群について、今後その食塩摂取源を検討する予定である。

福岡地区において、小学校1年生1112名(男611名、女501名)、中学校1年生1652名(男838名、女814名)、高校1年生1881名(男914名、女967名)について、学校保健による心臓検診に際して、日本コーリン社製の自動血圧計で血圧の測定を行った。この結果、血圧測定値の95パーセンタイル値は、小学校1年生では男130/75、女135/75、中学校1年生では男140/75、女135/75、高校1年生では男150/80、女140/80と考えられた。このシステムは学校保健の心臓検診の一部である心電図検査と同時に行われるので、心電図をコンピュータ処理する際に、血圧測定値もコンピュータを介してフロッピーディスクに記録され、血圧測定後のデータ処理も迅速かつ正確に行うことができる。この後このシステムを小児成人病対策に活用する予定である。

福岡市での3歳の幼児637名(男319名、女318名)について調査した結果、肥満度15%以上の肥満児は、男4.1%、女2.2%であった。この中に肥満度55.7%を示す高度肥満の男児があり、これについては肥満の原因について検討中である。

東京、青山にあるこどもの城の体育事業部において、幼児の体の動きの特徴を検討した。対象は幼児の体育活動プログラムに参加している5、6歳児8名である。サッカーゲーム中の動きをビデオ

オに撮影し、これを再生して個人および集団の動きの評価を行った。この評価にはコンピュータを用いたが、今後この方法により、幼児の動きの特徴が定量的、定性的に分析できると考えている。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約: 幼児期の成人病危険因子については、まだその実態が十分に把握されていないのが現状である。そこで、この研究では、幼児期の肥満を中心に、北海道(旭川市)、東北(盛岡市)、関東(千葉市、八日市場市)、中部(沼津市)、近畿(京都市)、四国(松山市、高知市)、九州(福岡市)の各地で疫学的な調査を行った。また、幼児期の体の動きを量的、質的に検討するための基礎的研究を行った。